1
1946年9月20日第三種郵便物認可

つながる ひろがる フェミ・ジャーナル
ふぇみん
WOMEN'S DEMOCRATIC JOURNAL *femin* ふぇみん婦人民主新聞 No.2937 2010/10/15

contents

2 3 …… 特集 沖縄・普天間基地
4 …… 性同一性障害の子どもへの支援
4 …… NHK「女性のためのアーカイブス」が開設
5 …… 新連載 目からウロコの排泄ケア
6 …… film『クリスマス・ストーリー』

性同一性障害の子どもへの支援

多様な性や生き方を認める社会へ

文●野坂祐子

性別違和をもつ児童・生徒にとって、学校生活は心理的な負担も大きい。性同一性障害の理解とよりよいサポートを考えることを目指し、「児童・生徒と性同一性障害」と題する講演会が8月22日に大阪で行われた（主催 財団法人日本性教育協会）。企画・運営を行った野坂祐子さん（大阪教育大学）が報告（企画・運営は、大阪府立大学の東優子さんと共同）。

2006年、性同一性障害（GID）と診断された兵庫県の小学生について教育委員会が保護者側の意向を受け入れ、本人が自認する性別で学校生活を認められたと報道された。学校生活には、男女別の制服や更衣室、トイレなど、性別違和をもつ児童・生徒にとっては悩みが多く、そのことが不登校などの一因になっているとの指摘がある。

今年4月には、文部科学省は都道府県教育委員会などに対して、担任や管理職をはじめ養護教諭、スクールカウンセラーなどが協力し、保護者の意向にも配慮しつつ、実情を把握した上で相談に応じることや、医療機関との連携を求める通知を出した。

多様な性の理解を

岡山大学病院・ジェンダークリニックでGIDの治療に携わる中塚幹也さんは、GIDについて「異性の体に閉じ込められた状態」と説明。同クリニックでは、性別違和に悩む人の相談や治療を行っている。

同クリニックでGIDと診断された661人のデータでは、性別違和は中学生までに9割が自覚しており、4分の1が不登校を経験、7割が自殺念慮をもっていたという結果が示された。自殺念慮の背景には、思春期では二次性徴の始まりや制服の着用、恋愛やいじめの問題があり、青年期では社会に出ていく際に受け入れてもらえない不安などが関連していると指摘。学校は、①GIDの子ども自身の支援、②在校生全体が多様な性への理解を深めるための教育、③保護者へのGIDに関する情報提供、の3つの役割を果たすべきという。中塚さんは「性別適合手術などにより性を変えることですべてが解決するのではない」と、社会が多様な性を理解し受け入れることが重要であると強調した。

（左から）中塚幹也さん、塚田攻さん、康純さん

周囲からの受け入れ

埼玉県・かわごえクリニックの精神科医である塚田攻（おさむ）さんは、発達心理の観点からGIDの子どもの特徴や課題を話した。

思春期の問題として多いのがいじめの問題。グループからの逸脱や言葉による暴力を受けることが多い。また二次性徴への嫌悪感や違和感、恋愛やからだのことなど友だちと性的な悩みを分かち合えないことも心理的な負担になっている。青年期に入ると、服装や性指向を身体的性別に合わせてみようと試みたり、無理な性行動をとったりしながら、GIDであると確信していく人もいる。

発達段階はあくまでモデルであるとしながら、発達上の困難さや不利な発達課題に直面せざるを得ないGIDの状況について、「支援や治療を通して新たなジェンダーアイデンティティーを確立していく過程がみられる。周囲から受け入れられることによって、より安定した成長が得られる」と塚田さんは話した。

性のグラデーション

大阪医科大学ジェンダークリニックの康純（こうじゅん）さんは、GIDを訴える児童・生徒の対応をしてきた経験から症例を報告した。過去10年間の受診者数は1190人で、近年は20代の人の割合が高いという。

身体的性別や戸籍を変更しても社会生活がうまく送れない人もいるので、性別変更手術前からのサポートが必要であることを強調。手術に慎重な意見もある一方で、慎重になることで国内での手術の敷居が高くなり、本人が自己判断で進めざるをえなくなる問題も生じている現状を指摘した。手術の可否の問題ではなく、「治療や手術をどういうふうに生き方に反映していくのかを聴くことが大切」と康さん。本人へのサポートと同時に、「社会が性のグラデーションを認めることが求められている」と語った。

会場には、学校関係者や医療従事者、支援者など様々な立場の人の参加があり、GIDの支援に対する関心の高さが感じられた。GIDの児童・生徒が直面している困難さは、性やジェンダーに関する社会の価値観や態度によるところが大きい。多様な性や生き方を認める社会のありようは、GIDに限らず様々な個性や課題を抱えた児童・生徒の理解や支援にもつながるだろう。